大学生における就職不安と進路選択に対する自己効力の関連

○松田 侑子

(東海学院大学人間関係学部)

キーワード：就職不安、進路選択に対する自己効力、大学生

The relationship between employment anxiety and career decision-making self-efficacy

Yuko MATSUDA

(Faculty of Human Relations, Tokai Gakuin University)

Key Words: employment anxiety, career decision-making self-efficacy, university students

目 的

これまで、キャリア選択の研究領域において、自己効力は肯定的な心理資源として多くの注目を集めてきた。Bandura (1977) に基づけば、不安は自己効力の情報源の一つとして挙げられており、不安は自己効力を阻害する要因とされる。例えば、東・安達 (2003) では、他の情報源である、遂行行動の達成、代理的経験、言語的説得などの経験から自己効力を形成する際に、不安はフィルターの機能をもつことが指摘されており、高不安者は、ミスや失敗などの否定的な側面に目が向きやすく、過去の経験が自己効力に反映されにくくなるという。従って、不安は自己効力に広汎に影響を与える要因と目される。

他方、キャリア選択において、高不安者と低自己効力者の間に質的な違いがある可能性も示唆されており (Kaplan & Brown, 1987)、不安という否定的感情と、自己効力という肯定的な心理資源の両者の関連について新たな視点から捉えていく必要があるといえる。以上を踏まえ、本研究では、不安の対象に焦点を当てた就職不安を取り上げ、各不安による自己効力との関係の違いを明らかにすることを目的とする。これにより、肯定的な側面と否定的な側面の両輪を考慮した支援の在り方を模索し、従来の自己効力を用いた介入研究に、有意義な視点を提供できると考える。

方 法

調査対象者 関東圏内の国立大学と東海地方の私立大学の大学生、計 498 名 (男性 266 名、女性 225 名、不明 7 名、平均年齢 20.51 ± 1.11 歳) である。本研究では、この内、企業への就職活動を行う予定の 3 年生、計 104 名 (男性 53 名、女性 50 名、不明 1 名) を分析対象とした。

調査手続き 2008 年 1 月下旬–2 月中旬に、大学の講義の時間内において無記名方式で実施した。

調査項目 ①就職活動不安尺度 (松田・永作・新井, 2010) : 就職活動に関する不安について尋ねた 20 項目 5 件法である。アピール不安・サポート不安・試験不安・活動継続不安・準備不足不安の 5 因子から構成される。②職業選択不安尺度 (松田・永作・新井, 2008) : 職業選択に関する不安について尋ねた 16 項目 5 件法である。職業移行不安・職業理解不安・決定方略不安・自己理解不安の 4 因子から構成される。③進路選択に対する自己効力 (浦上, 1995) : Taylor & Betz (1983) の Career Decision-Making Self-Efficacy Scale を参考に作成された 30 項目 4 件法である。本尺度は、得点が低いほど、自己効力が高いことを意味している。

結 果

まず、就職活動不安 5 因子・職業選択不安 4 因子と、進路選択に対する自己効力の関連を明らかにするために、相関分析を行った。その結果、全ての不安との間で有意な正の相関が認められた。続けて、就職活動不安 5 因子を独立変数、自己効力を従属変数とした、強制投入法による重回帰分析を行ったところ、アピール不安とサポート不安からの有意もしくは

や有意傾向のパスが認められた (Figure1)。

Figure1 就職活動不安と自己効力の関連

同様に、職業選択不安に関する重回帰分析を行ったところ、職業移行不安からのみ有意なパスが認められた (Figure2)。

Figure2 職業選択不安と自己効力の関連

考 察

本研究の目的は、就職不安と進路選択に対する自己効力の関係を明らかにすることであった。重回帰分析の結果から、就職活動不安においては、サポートに対する不安が高いと、また職業選択不安においては、社会へ出ることへの不安が高いと、進路選択に対する自信が低いことが示された。相関分析では、他の因子も自己効力との間で有意な相関を示していたことを考え合わせると、それらは疑似相関であり、実際には、主にサポートに対する不安や社会に出ることへの不安を通して、自己効力と関連していると推測される。

サポート不安において特筆すべき結果が得られたことについては、自己効力を高める他の情報源が関わっていると考えられる。例えば、代理的経験では、周囲で同じような悩みを持っている人 (モデル) がいることで、どのように悩みを解決していけるかを参照することができるとされ、言語的説得の観点からは、他者から示唆や助言をもらうことで自信を高めることが可能になるとされる。しかし、サポートに不安を感じているということは、そうした他者の存在の欠如を意味していると考えられよう。

また、現代の若年雇用の問題の背景には、“移行”の難しさが背景にあると考えられている (OECD, 2000)。職業移行不安は、いわば就職というライフイベントそのものに対する不安であり、キャリア選択をうまく行えるかどうかは、就職後の自分を占う上でも重要な事柄である。従って、キャリア選択に対する自信との中核的な関係が示されたと考えられる。